

三月十一日の東日本大震災で今現在一万五千人をこす死者、四千人近い行方不明者という数多い被災者がいる中、この震災で両親をなくした震災孤児と呼ばれる子供が二百人以上いるそうです。震災孤児とは別に、様々な理由で親と一緒に暮らすことが出来ない子が全国で三万八千人いるそうです。その中の約一割の四千人が、里子として養育家庭に預けられています。私は四人兄弟ですが、私以外の三人はすべて里子です。だから、私の家族は血で結ばれた家族ではありません。血のつながりって、なんなのでしょう。家族とはなんなのでしょう。か。

初めに来た里子は、私が小学校三年生の時に、一才で我が家にやってきました。来た時は、色白でじつとすわって、表情も乏しく、今現在の元気な妹とは別人のようでした。

妹が来た時、私が一番困ったことは、友達や知り合いに、「妹が里子だ。」ということ伝えることでした。やっぱり周りの人も、突然妹ができたのでおどろいたのではないかと思います。私もかくしてはおけないので説明すると、

「捨て子なの？」

とか、

「本当は赤の他人なんでしょう？」

などと言われてとても傷つきました。自分でも友達を理解を得ようと色々悩み「血がつながっていないと妹って言えないのかな。」などと考えてみました。ある日、両親に相談すると、

「こんなにかわいいんだし、こうしてこの子にめぐり会えたってことはあなたがこの子の姉になって何か役に立てる時が来るかもしれないんだから、血のつながりなんか関係ないの。自信をもってこの子の姉になって何か役に立てると私をばげましてくれました。そんなことがきっかけで、自信をもって「私の妹だ。」と言えるようになりました。

その時私は、

「血のつながりなんて関係ない。ただ一緒にご飯を食べたり、お風呂に入ったたり、一緒にテレビを見たり、たまにトランプをしたり。それだけで家族になれるんだ。」

と気付きました。一緒に生活することがどんなに大切か。今思うとこれこそが本当の家族に近づく方法なのではないかなと思います。

そして昨年末、新たに二人の里子がわが家にやってきました。初めに来た子とは違って両親の顔も名前も知っています。だから、来たばかりのときは「本当のママに会いたいな。」とか「本当のおうちに帰りたい。」などとつぶやいていました。でも今は私の両親のことを、パパママと呼ぶようになり、とてもうれしく思っています。

以前、新聞のコラムで次のようなことが書いてありました。

「墓参りに行きふと駅伝を思い浮かべた。つなぐのはタスキではなく命である。この駅伝はやかいなこと、自分の意志でチームを選べない。リタイアも許されない。リレーを終えても次の走者が一人前になるまで伴走しなければならぬし、弱り行く前の走者の介護が必要になることもある。しかもどこまで走り続ければいいのか走者にはわからない。」

という記事を読み「なるほどな。」と思いました。例えば血のつながりがなくても、「人生」という命のタスキをつなぐ駅伝において、「家族」というチームでどんな困難にも立ち向かい、助け合い支え合いながら走り続けるチームワークを「家族の絆」と呼ぶのではないのでしょうか。家族の絆が強ければ血のつながりがなくても本当の家族と呼べると思いませんか。

この震災を通して私は、家族がそばにいてくれることが一番の幸せであり、絆を深めるための一番大切なことだと思いました。あたりまえのようになってしまうている家族の大切さを多くの人に感じてほしいです。そして、虐待や悲しむ子どもがいらない未来を私たちの手で作って行きたいです。